

- 《履修上の留意事項》1.この講義は令和7年7月30日（水）、7月31日（木）、8月1日（金）に実施する。原則的に単位取得のためにはすべての講義・演習に出席しなくてはならない。
- 2.全学部（専門学校含む）混成のグループで演習・話し合いをおこなう。
- 3.対象者・家族がケアを受けている医療福祉施設や自宅、自助サークル活動などに、大学よりオンラインでリアルタイムに訪問・参加し演習をおこなう。そのため体調管理、身だしなみ、言動に充分留意すること。教員が不適当と判断した場合には、演習に参加させない。その場合は、「失格」として扱う。
- 4.履修を希望する者は、本科目に関する説明会に出席する必要がある。説明会の日程については掲示版、i-portal等で連絡する。

《担当者名》薬学部：○早坂敬明、浜上尚也、木村治、岩尾一生、山本隆弘
 歯学部：○飯田貴俊、越野寿、永易裕樹、菅悠希、原田文也
 看護福祉学部：○川添恵理子、竹生礼子、○巻康弘、鈴木和
 心理科学部：○、金山裕望
 リハビリテーション科学部：○澤田篤史、○本家寿洋、○葛西聡子
 医療技術学部：○小野誠司
 歯科衛生士専門学校：○岡橋智恵、秋元奈美

【概要】

多職種連携は、保健・医療・福祉の現場において、対象者・家族のQOL(Quality of Life:生命・生活・人生の質)の向上のために対象者・家族と多職種がケアや社会的課題の解決を通じて協働することである。現代の複雑で多様化した保健・医療・福祉の課題を持つ社会において、一人の専門職がその知識や能力を駆使して、単独で課題を効率的に解決することは困難である。互いに異なる知識・能力をもつ複数の専門職が協働することが必要とされる。

本講義では、多職種連携の実際の場面から、対象者・家族の全体像について話し合い理解することを通して、保健・医療・福祉の分野における多職種連携のあり方を学ぶ。具体的には、地域包括ケアにおける専門職の活動を、多職種連携による対象者理解の観点に注目しながら同行訪問・オンラインで見学する。対象者理解を進めるために、専門職、対象者・家族に対してインタビューする。多職種が連携して対象者の全体像をとらえる。得られた情報をもとに自分の専門とは異なる学科の学生とともにディスカッションを行い、多職種連携に関する考えをまとめる。

【学修目標】

1. 多職種連携の理念、意義と実践について理解できる。
2. 多職種の視点を統合して、対象者、家族のニーズを把握し、正しく認識できる。
3. 異なる職種を目指す学生で組織されたチームを良好な関係に発展させ、対象者理解に向けた話し合いができる。
4. 地域包括ケアにおいて自分が目指す職種および他の職種が果たす役割について理解できる。
5. 地域包括ケアにおける多職種連携のあり方を理解することができる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1) 2	オリエンテーション・講義	・講義全体の目的と内容、進め方の説明 ・演習の流れおよび演習態度（服装・個人情報の保護） ・グループ作り、役割決め ・講義「地域包括ケア」「ICF」	早坂敬明 浜上尚也 木村治 岩尾一生 山本隆弘 飯田貴俊 越野寿 永易裕樹 菅悠希 原田文也 川添恵理子 竹生礼子 巻康弘 鈴木和 金山裕望 澤田篤史

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
			本家寿洋 葛西聡子 小野誠司 岡橋智恵 秋元奈美
3) 5	グループワーク・ カンファレンス 1	見学演習するケースに関する資料の読み込み・ICFの作成 ・職種別の検討：とらえた情報、確認する点、疑問点、訪問時に対象者、家族および専門職に対して質問する内容の検討・作成 ・多職種グループによる検討：各職種からの意見の共有。ICFに基づき、理解できた情報の整理・解釈・分析。専門性を活かして職種ごとにとらえた情報・分析・解釈をもちより、統合。 訪問時に確認する点、疑問点、演習時に対象者・家族、および専門職に対し質問する内容の作成 カンファレンス 1：演習グループごとに教員を加えてケースカンファレンスをおこなう。	早坂敬明 浜上尚也 木村治 岩尾一生 山本隆弘 飯田貴俊 越野寿 永易裕樹 菅悠希 原田文也 川添恵理子 竹生礼子 巻康弘 鈴木和 金山裕望 澤田篤史 本家寿洋 葛西聡子 小野誠司 岡橋智恵 秋元奈美
6) 7	同行訪問・見学	演習前ブリーフィング 多職種連携協働によりケアがおこなわれている現場を、グループごとに同行訪問またはオンラインで見学する。 対象者・家族、および専門職に対して準備したインタビューをおこなう。	早坂敬明 浜上尚也 木村治 岩尾一生 山本隆弘 飯田貴俊 越野寿 永易裕樹 菅悠希 原田文也 川添恵理子 竹生礼子 巻康弘 鈴木和 金山裕望 澤田篤史 本家寿洋 葛西聡子 小野誠司 岡橋智恵 秋元奈美
8) 10	グループワーク・ カンファレンス 2	個人でまとめをおこなう。ICFを修正する。 学科別に見学したケースの報告と専門的な対応および多職種連携協働のあり方について、教員を交えて話し合う。 グループにもどり、自分の専門的な視点からとらえた意見を交換する。 ・各専門職の視点から、理解を深めた対象者の状況をICFに盛り込み、ICFを修正・発展させて、対象者の全体像をとらえなおす。	早坂敬明 浜上尚也 木村治 岩尾一生 山本隆弘 飯田貴俊 越野寿 永易裕樹 菅悠希

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
		・対象者がどのような多職種連携によって支えられて生活しているのかについて、訪問の場面以外にも視野を広げて検討する。 ・対象者の全体像を踏まえ、目指す姿（共通の目標）を設定する。	原田文也 川添恵理子 竹生礼子 巻康弘 鈴木和 金山裕望 澤田篤史 本家寿洋 葛西聡子 小野誠司 岡橋智恵 秋元奈美
11 ） 15	発表会 グループワーク・ カンファレンス3	グループごとに学んだことをICFをもとに簡潔にパ ーポイントにまとめる。 グループごとに発表する。 学科ごとに分かれて：今回の演習で学んだことか ら、地域包括ケアにおいて自分が目指す職種および他 の職種が果たす役割について、話し合う。 多職種グループにて：学科ごとの話し合いを踏まえ て、地域包括ケアにおける多職種連携のあり方をディ スカッションする。 レポートを作成する（評価対象）	早坂敬明 浜上尚也 木村治 岩尾一生 山本隆弘 飯田貴俊 越野寿 永易裕樹 菅悠希 原田文也 川添恵理子 竹生礼子 巻康弘 鈴木和 金山裕望 澤田篤史 本家寿洋 葛西聡子 小野誠司 岡橋智恵 秋元奈美

【授業実施形態】

面接授業

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【アクティブ・ラーニング】

導入している

【評価方法】

- ・演習状況および提出物をもとに総合的に評価する。
- ・演習目標到達度 70%、記録物 30%

【教科書】

教科書1：上田敏 編 ICFの理解と活用 人が「生きること」「生きることの困難（障害）」をどうとらえるか KSブックレ
 ット 2005

【参考書】

参考書1：北島政樹 編 「医療福祉をつなぐ関連職種連携」 南江堂 2013

参考書2：埼玉県立大学 編 「IPWを学ぶ 利用者中心の保健医療福祉連携」 中央法規 2009

【備考】

その他：学部混成のクラスを編成して授業を行う。

【学修の準備】

事前に指示された以下について予習・復習をおこなうこと。ICF、地域包括ケアシステムを概説する文献を読む。関連する用語・

制度について調べる（例：地域包括ケア、後期高齢者、介護保険、居宅介護、訪問介護、訪問看護、訪問リハビリテーション、訪問薬剤指導、退院支援、退院調整、ケアプラン、介護支援専門員(ケアマネジャー)、C G A、I C F、褥瘡、オレンジプラン、訪問歯科事業など）。演習するケースに関する保健・福祉・医療に関する事項について調べる。（予習・復習4時間）

【復習】

・各回の終了後に、学修内容を自分の言葉でまとめる。

【演習施設】

大学の教室と本学地域包括ケアセンター、対象者の居宅をオンラインで接続して演習をおこなう

【実務経験】

早坂敬明、浜上尚也、木村治、岩尾一生、山本隆弘（薬剤師）、飯田貴俊、越野寿・永易裕樹・菅悠希・原田文也（歯科医師）、川添恵理子・竹生礼子（看護師・保健師）、巻康弘・鈴木和（社会福祉士）、・金山裕望（公認心理師）、澤田篤史（理学療法士）、本家寿洋（作業療法士）、葛西聡子（言語聴覚士）、小野誠司（臨床検査技師）、岡橋智恵・秋元奈美（歯科衛生士）

【実務経験を活かした教育内容】

医療人としての実務経験を活かして、医療職として持つべき多職種連携医療の実践につながる教育を実施している。